

シク教の神の概念についての一考察

——Sacu と Hukamu を中心として——

保坂俊司

はじめに

極めて象徴的な表現が許されるならば「シク教は、その発生地
の地理的位置が象徴的に示すように、ヒンドゥー教とイスラム教
の両者を融合した宗教である」と表現できよう。それはインド人
一般のシク教認識が「シク教はヒンドゥー教を母とし、イスラム
教を父として生まれた子供のような存在(宗教)」となっているこ
とからもうなずける。

しかし、この点に関して更に一步踏み込んでシク教の教理上
に見い出せる両教の影響をそれぞれの事項について学問的に研究し、
両者との関係を綿密な考証によって立証しようとした研究は、残
念ながら極めて少ないのである。このシク教研究の現状は、恐ら
く以下のような理由によって説明出来るのではないか。まず、イ

ンド人の研究者にとってはあまりにも自明のことであり、今更証
明することの意味を感じない。または、あまりに大きな問題であ
るのであつかうことがはばかられている。そしてさらに、シク教
を研究する外国人研究者が少なく、したがって伝統や因習に拘泥
しない視点からの研究が少ない。いずれにしても多くのシク教の
研究書・解説書は、この点に関して明確な説明を与えていない。

たしかに、この問題は大問題であり容易に立ち入ることは出来
ない問題であろうが、しかし、この最も基本的で重要かつ興味深
い問題を避けて、他の視点をあつかうことは私のシク教研究の第
一步としては適当な方法ではないと思われるのである。

勿論、この様な大問題を正面から取り扱うことは非才の私には
甚だ難しいのであるが、あえて一石を投じて、管見をもってこの
問題にとりくむこととしたい。今回は、その準備段階として「シ

ク教の神概念」について少しく考察することとしたい。具体的には、シク教の教理学上のキーワードである Sacu と Hukamu について、その語源に遡って意味を探り、またシク教でどのように展開されているかを明らかにしたい。なぜならば、シク教の神概念は極めて特徴的であり、シク教研究の端緒とするには最適と思われるからであると同時に、多神教を奉ずるヒンドゥー教と厳格な一神教たるイスラム教との根本的相違であるこの神観念をシク教が如何に処理したかを知ることが、比較思想および宗教学的に興味深い問題であると思われるからである。つまり、我々はこの問題研究をとおして異なった思想、宗教の出会いそしてその融合、統一といった比較思想の好例に接することが出来るからである。

シク教の神概念の多様性

シク教の神概念について論じようとする時、まず問題となるのがシク教は一神教か多神教か、それとも汎神教なのかということである。

これについて聖典グラント・サーヒブは「神は唯一にして、真理を御名とせり云々」⁽¹⁾とその冒頭でのべている。この点を重視して、「シク教においては単一の神の存在を宣言しており、それは全てのシク教徒が異口同音に認める所である」⁽²⁾と認識し、シク教を一神教の宗教の範疇に入れる学者もある。しかし、果してそう言いきれるかどうかが甚だ疑問である。

なぜならば、その反証ともいうべき汎神的な表現がグラント・サーヒブの中には数多く見出せるからである。例えば「誰れが(神について) 良いとか、悪いとかの判断をすることが出来るようか。全て我々の内に宿る神を見ているにすぎない云々」⁽³⁾さらに「創造主よ、あなたはすべてに遍在する」⁽⁴⁾とある点などから明らかになろう。

加えてそれを裏づけるように、シク教の神には独自の名称、つまりイスラム教におけるアッラーのごとき固有名詞がないのである。そのかわりに、シク教においては神を表す名称が非常に多い。その一例を挙げるならば、Hukamu・Onkaru・Adi Isan・Sahibu・Gosami・Govindo・Nathu・Sacu・Vasuden・Narau 等々数十におよぶ。そして、これらの言葉はインド・ペルシャ・アラビア起源等様々なのである。つまり、これらはシク教においては全て神の一面のみを表す言葉であって、一つの言葉が神の存在の全てを表しているのではない。これは何を意味しているのであろうか。

一つのヒントとなるのは「有限なる人間には、神を表す事など出来はしない。たとえ十萬(沢山)の意味」⁽⁵⁾もの時を費したとしても」の一文である。つまりシク教では、神は人間にはとうてい表現し得ない崇高な存在であって、それだからこそ我々人間はその神の諸相をとらえて間接的に様々に呼び表す以外に方法がないと解釈することである。それは逆にいえば神が至る所に遍在して

いるということにもなるのではなからうか。

いずれにしても、シク教の神概念は余りにも問題が大きすぎるので、とりあえず今回は前述のとおり、Sacu と Hukamu に的を絞って考察することにした。この二つの言葉はシク教にとって極めて重要な言葉なのである。それは後述する様に、Sacu も Hukamu も神の存在を表現する言葉の中で一番聖典中に使用される頻度の高い言葉であるからである。この両者の語源を辿ってみれば、それぞれヒンドゥー教の Satya であり、イスラム教の Hukm である。この二つの言葉は、それぞれの宗教内において特別な意味を付加されている言葉である。そこで、これらの言葉が本来持っている哲学的・宗教的意味とシク教内における哲学的・宗教的意味を比較研究することとした。この Satya と Hukm とシク教の神概念を表す Sacu と Hukamu とがどのように結び付けられたのか、シク教の神概念を知る上で極めて興味のあるところである。そこでまず、ヒンドゥー教内に於ける Satya について考えてみたい。

ヒンドゥー教の Satya についで

まず、Sacu の語源である Satya が、ヒンドゥー教、又はインド精神史上どのように考えられていたかをみてみよう。

Satya は「古代インドでは真実語 (Satya) に特別な潜在力を付加していた。そしてこの真実 (Satya) の行為によって、心中で願

ったことが成就できると信じていた」⁽⁶⁾。このことからわかるように、インドの伝統として Satya という言葉には、単なる言葉そのものの意味以上に伝統的な、言葉にならない、言葉を支えるもうひとつの意味付けがあった。そして、それには非常に神秘的な力が込められており、一種の呪力が込められているかのように信じられていたのではないかと思われる。この点について F. W. Burlingame は「事実の儀礼的宣述、命令、決断、祈禱などにともなう行為者の目的を達成させること」といい、さらに彼は「真実が述べられており、真実が込められた言葉に付加された価値が在るところの礼儀作法」⁽⁷⁾の神秘性、言い換えれば、呪力を強調する。これをさらに説明すれば、「真実の行為は雨乞いにも、こうこうと燃えさかる炎を退散させ、毒を解毒するための解毒剤にもなり、川の流れを変えることにも使われた」⁽⁸⁾。このように Satya はインド文化においては、宗教上極めて重要な言葉であったことが解る。それは宇宙の真理が言葉の中に秘められていると信じていたかのように察せられる点からも明らかである。つまり、「神は、それ自身しばしば宇宙の機能が表されているところの、真実に拘わることをとおして、彼らの力を保持することが出来る」⁽⁹⁾と述べられることから窺い知れるように、ヒンドゥーの神々でさえ従わざるをえない絶対的な法則 (きはん) と考えられていた。

以上のことから解るように Satya には、本来的に不思議な力があるとされていたのであり、それは極めて強い呪力をもつ普遍法

則そのものである。そのことについて「真実の言葉を発することによってなんらかの目的、それも通常では実現不可能な事をなしとげようとするものである。原則的には真実そのものの中に秘められていて信じられる力に依ってきわめて現実的な欲望を処理しようとするもので、この意味で呪術の一種である」と指摘されるようなこの言葉への信仰があり、それは前述のように抽象概念としての Satya とそれを表現した言葉としての Satya の同一視によることからおこる。

以上のことから推定すると、Satya はインド精神史上は極めて重要でしかも、ヒンドゥー教においては、この言葉の内には超越的存在を前提とした伝統的な思维が包含されており、その一展開として、抽象性の高い超越者（神）を想定していたということができよう。いずれにしても、この言葉が宇宙の原理、または普遍的法則を表していると考えられていたことは明らかである。このことは、さらに、民衆のレベルではより人格化された神のイメージによって表現されたのではないか。そこで初めて民衆はその人格化された普遍法則の存在を信仰した。

つまり、Satya の背後には何らかの超越的な存在、つまり神の存在が想定されていたのではないか。そうであればこそシク教教理の内に、この言葉 Satya が「神」を表す言葉として、とり入れられたのであろう。

つぎに、「真理である神の力は真理中の真理であり、真理は彼

の所産である」としてシク教がどのようにその教理の内にヒンドゥー教の伝統的概念である Satya をとり入れたかをしめそう。

「真実に秘められる呪的な力への信仰が、仏教的概念とかかわりつつも仏教徒一般の間におこなわれた⁽¹¹⁾」。この記述は仏教に限ってはいるが、民衆の間に於いては、ヒンドゥー教徒にもいいえたことであろう。人々は Satya という言葉そのものに、ときに神を感じたのではなかったか。そうでなければ、言葉そのものに呪力を持たせることなど出来るものではない。少なくとも初期のシク教を支えた素朴な民衆の間では、神もまた宇宙の真理も明確に区別されたとはいいたいのではないか。

この故に、シク教においては Satya が盛んに用いられ、しかも神を表す言葉（もちろん神を表す固有なる名詞はなかったが、それに準ずる用語として機能している言葉）の代表として取り入れたのではなかったか。

では具体的に聖典から Saatu についての記述を抜き出してみ

と、
eku Onkar sati namu karta purakhu nirbau nirbairu
akalu murati ajuni sainb hangura prasadi 「(神は⁽¹²⁾)唯一にして、真理を御名とし、(この世を)創造し、(彼は)恐れなく、敵意なく、永遠の姿を持ち、生ぜず、自在であり、(これらは)グルの恩寵による」

これはシク教の聖典であるグラント・サーヒブの最初の文である。

この中から Sacu の特徴がいくつか読み取れる。まず神を表す Sacu の属性が非常にブラフマン神に似ていること、つまり、シク教が何故 Sacu をもって神を表そうとしたかが推察できよう。

加えて、この一文は、前にも示したように、唯一神を宣言していること。そして、その神は創造神だということである。さらに、その特徴として、何ものにも依ることなく自分自身で存在する自在神であることから、シク教がヒンドゥー教のブラフマン神とイスラム教のアッラーの神の属性を巧みに融合しようとしている点を窺い知ることができるのではないだろうか。しかし、それ以上に重要なことは、グルの存在が早くも強調されていることである。

このように、ヒンドゥー教における Satya の意味内容から、シク教において Satya が Sacu として止揚されて意味転換が行われた過程を、一応諒承出来たと思う（詳細は他の機会に検討したい）。

さて、次にもう一つの重要な用語 Hukamu について考えてみよう。

Hukamu について

Hukamu の語源は Hukm である。その元の意味は、イスラム百科辞典によれば、「制する・制御する」という意味である。しかし、さらに進んで、哲学・宗教学にも広汎に用いられる。つま

り、この言葉は「コーランによると宇宙の理法、または神の意志を表す」というように、ヒンドゥー教における Satya のときも重要な言葉であることが理解できよう。

さらにその意味を追求するならば、「判断もしくは肯定否定を決めること」などの意味に加えて、「是非の判断にかかわるところの物と物との関係を形成するもの」という意味があり、さらに抽象的な意味になると「普遍的真理であるかないかを判断する」となり、超越的な存在を想定しうる概念が含まれることになる。実際のこの言葉が宗教法の分野での重要語であることを考慮するならば、この言葉が示す判断の背後にそれを可能にする絶対神の存在を仮定することは、早計ではないであろう。ここに、イスラム教的な神の存在が、Hukm をとおして、浮び上がったものではなからうか。しかし、Hukm については、さらに研究を必要としており、今後の課題としたい。

さて、Satya と Hukamu とをその原意に遡って考えてみたが、ここで明らかなことは、どちらの言葉も超越的な力を表す言葉として機能していたという事実である。つまり高度な宗教教理に疎い一般庶民にも神の存在を認識させるために十分説得力をもつ言葉であった。そしてそれがグルの口から発せられたときには、双方の信者に超越者の存在（神）を思い抱かせたことであろう。そして、その聴衆は、外ならぬヒンドゥー・イスラム両教徒だったのである。彼等に共感をおぼえさせつつシク教の教理は独自性を

じょよに強めていったのである。

ここにシク教の神観念の特徴が明らかになるのではないか。以下において、シク教における Sacu と Hukamu をとおして、神の概念を考察する。

シク教における Sacu と Hukamu の概念

シク教における Sacu の意味は、まず神の力によって成立している究極的・普遍的真理であるとされる。これは伝統的意味とはほぼ同じである。つまり、シク教においても、Sacu は前述のとおり、の伝統的意味をふまえている。

次にシク教にとり入れられた Satya (sacu) 元来の意味を踏まえながら次の文を考えてみよう。

saca sahiths sacu nai bhaka bhuw apara 「真理は神なり、
(神は) 真理を名とせり、(真理〔神の名〕は) 不滅の愛をも
って唱えられる。」⁽¹³⁾

nanakemvai janiai sabhu ape saciaru 「カーナクよ、だから
知るがよい！ 真理は、彼そのものだ。」⁽¹⁴⁾

「真理なる神は、真理の中の真理であり、真理は彼のまじ
ます所である。」⁽¹⁵⁾

これらのものから、以下の点が明らかになってくる。シク教の神は真理を名前としている。そして同時に、真理は神そのものである。つまり、この世に見い出される真理はすべて神の一部

として、または、神はこの世の真理の最高のものとして認識された。それを表すのが *word* なる言葉なのである。神はいたるところに遍在するというシク教の考え方が、そこに窺われるのである。この性質を顕著に示すものとして、煩鎖になるのを避けるため原文を略して紹介すれば、

「神は世界中に遍在し、唯一なる神よりすべては生ずる。」⁽¹⁶⁾

「神は彼自身料理人であり、自ら作り、自ら味わう。

彼はおのれと結婚し、自身配偶者であり、自らと床に就く。
彼は、愛に溢れるわが主であり、いずこにも遍在する。」⁽¹⁷⁾

以上の例文からも推察されることだが、グラント・サーヒブ全体からいって、普遍性を持った神の属性を表した時には *God* が特に多く使われていることである。つまり神が普遍的であるとする時、その神は Sacu とよばれるのである。

次にイスラム教起源の Hukm (シク教の Hukamu) がどの様に、シク教の中に取り入れられ、展開されているかを観てみよう。

まず次の一文を考えてみよう。

Hukami jovani Akara Hukamu na kahima jaiil

Hukami hovani jia hokami Mileail

「神(の命令)によって(人は)創造されり、その神(の命令)は(人間には) 語ることとは出来ない。

神(の命令)によって、魂は宿り、神(の命令)によって喜びは獲得される。」⁽¹⁸⁾

この一文から明らかなことは、神と、その働きともいえる彼の命令または意志とを同一視していることである。勿論今まで論じて来た様な理由によって、そのことが立証できるのであり、シク教徒にとっては Hukamu は神の名称の一つとして受け入れられているのである。それを表す例として、

Nanaku Hukami avhu ishu

「ナーナクよ！ 私（神）は自ら生まれ、また死ねり。」⁽¹⁹⁾

の一文などが挙げられよう。ここではまったく神の自称として表されている。しかも、実に強い力をもって、この世を動かしている神であり、それはイスラム教のアッラーの如き側面を彷彿させる神として表されているように思う。今回挙げたのは数少ない例であるが、グラント・サーヒブ中に頻出する Hukamu について知るには十分であると思える。

さて、以上簡単に Sacu と Hukamu の言葉によって表される、シク教の神の異なった面を一応知ることが出来たと思う。したがって、次に我々が考えねばならぬことは、この多神的側面と一神的側面を、どう融合させているかである。この一見相入れない性質を融合させるために、シク教では極めて抽象性の高い神概念を想定しているように思われる。つまり、シク教の神は、前述したとおり、我々には表現できないのである。それほどに崇高であるとして規定される。これはとりもなおさず抽象的な神を想定することで、上記の矛盾対立を止揚したことに他ならない。

したがって、この世の存在には神の意思のごとき何ものかが働いており、それによってこの世が成り立っているというのである。この神の意思をヒンドゥー教的に捉えれば、Sacu となる。というのも普遍的真理として捉えたからであらう。これはイスラム教の神の絶対的意志 (Hukm) と共通する。ゆえにその言葉をとって Hukamu と表したのではないか。ここに絶対的存在としての神と、この世を成り立たせている普遍的真理として表される二つの神の一致を、抽象神を想定することにみいだしえる。

ここで初めて我々は、ヒンドゥー教の *Shiva*、イスラム教の *Hukm* と、シク教の *Sacu* と *Hukamu* の関連を抽象神の存在を中心として、弁証法的に止揚できた。この故にシク教の神概念は、伝統的なヒンドゥー教・イスラム教両教の神概念を止揚した形態を持つ、まったく独自の神概念として説明することが出来た。インドの学者の中にはこれを一神教的汎神論と表す人もいる。いずれにしても、ここには、ヒンドゥー教のそれでも、イスラム教のそれでもない、まったくシク教独自の存在がある。

シク教の神性の特性とグルの存在

以上で、シク教教理上のキーワード・*Sacu* と *Hukamu* の考察は一応終了し、次にこの独自の固有名詞を持たない抽象神の特性について少しく考察したい。

このシク教の神は、先述のように創造神とまずみなされる。そ

れは「(神は)その始原において真理であった。そして過去においてもそうであつたし、今もそうであるし、これからもそうであろう。」さらに、「神は偉大にして、偉大なる神はこの世を創り、それをなりわいとせり。」などと表現されているのである。

さらに、「(神は)彼自身最高の真理であり、美であり、至福であり、永遠である。」と表現される如く、全智全能の力を有するよう表現されている。

したがって、人格神として表現されることは決して許されない。例えばヒンドゥー教では盛んに行われる偶像の崇拜も、「ヒンドゥー教徒は正しい道を失ってしまった。そして、彼等は誤れる道に進んでいる。……中略……彼等は、偶像を拝している。」このように否定されてしまう。

これは、シク教の神概念の最も基本的な所であるが、

「神は(限りある存在の)人間には、理解することが出来ないし、語ることも出来ない。

もし、それを試みる人が居ても、彼はあとで後悔するだけ。

この世に、神の存在を表す紙もペンもない。(神を)思つて、従うのみ。

それは、清らかを名とする(神)であり、その神に従う者は彼の心を悟る。」

ということになり、偶像崇拜などはもつてのほかということになる。

しかし、これでは一般者である我々には、神の存在は認識することが出来ない。

ここに、シク教独自のグルの存在が、重要になってくる。シク教では、神の言葉を語るもの・神の恩寵を受けるもの、これをグルとよぶのだが、彼によつてしか神は知りえないのである。「……誰も何も語れない。ただグルによつてのみ彼(神)は知られる。」「(神は)すべてを(グルに)与えり、彼は(グルに)慈悲を与えり。すべてを彼(グル)に与えり、そして彼は満たされり。(神は)誰も述べることは出来ない。ナーナクよ！(神は)グルによつて獲得され(知られ)り。彼(グル)のみが神それ自身を知りたまえり。」と述べて、神の存在が、じつにグルによつてのみ表し得ることを力説する。ここにシク教の宗教的特徴があり、シク教はここからまた始まる。

さらにつづけて、

「バンディットも(神の教えを)理解できなかった。それはプラーナにいてあるのに、クアジスも理解できなかった。

コーランにいてあるのに、

ヨーギンも理解できなかった。その他の人も同様であつた。

唯、この世を創つた神とグルのみが知れり。」

「真理を体得せるグルの献身なくば救いも、神の究極の光を見ることもない。」

「我が友よ、グルの献身的礼拝なくしては、神は何も行えない。

(29)
「い。」

このように、グルは啓典宗教の予言者的存在であると同時に、神をも場合によっては操ることも出来る存在なのである。

さてシク教が独自の創造神として神をたてることは、他の神の存在と必然的に対立せざるを得ないことになる。その点をシク教はどう考えるのであろうか。

シク教は二神論を嫌う。これはシク教がヒンドゥー教に特有の化身（特に偶像）の存在を否定することとも関係があるであろう。

「二神論を語る者は、頭をゴミの中になげこむようなもの⁽³⁰⁾。」
「二神論を諦めた者は、神の御名を唱えれば救われる。」⁽³¹⁾

このように、シク教の神以外にはこの世に神は存在しないことになるのだが、具体的にヒンドゥー教・イスラム教そのものを、シク教ではどのように考え、どのように包含しようとしたのであろうか。

基本的にはシク教は他の宗教を、やはり、誤りのある宗教とみなす。

「この世にカーストも bhakhe (yoga) 行者が着る衣装も、ブラフマンもカトリもない。この世に神（化身の神々）はなく、寺も牛もヒンドゥーの呪文もない。」⁽³²⁾

このように、あらゆるヒンドゥー教の祭祀にまつわる諸事を否定するが、しかし、神そのものの存在は否定していない。これはイスラム教に対しても、同様である。

「この世にムスリムの学者もその判断もなく、ムスリムの教えも、マサーイク（ムスリムの賢者）ハッジ（メッカ巡礼者）の価値などない。」⁽³³⁾

このように規定したうえで、神の存在を示す。

「この世に、ヒンドゥー教もイスラム教もない。唯一の神のみ。」⁽³⁴⁾

つまり、ヒンドゥー教もイスラム教もじつは同じ神の違った姿を拝していたのだとして、

「グルはシバ神・グルはヴィシュヌ神・ブラフマン、そして、グルはパールバティの支配者、ラクシュミーの支配者、サラスヴァティの支配者なり」⁽³⁵⁾

以上で明白になったであろうが、シク教の教理上最も注目すべき存在は、グルの存在である。シク教の教理は、このグルの存在にヒンドゥー・イスラム両教の神概念を統一する特性を与えたのである。

このように、グルの役割を宗教上の特異点ともいえる位置に設定することで、神は抽象的で、超越的な形態のままに、全ての権限をグルにゆだねたのである。⁽³⁶⁾ そうすることで、宗教教理上の矛盾対立を止揚しようとしたのである。ここにシク教の神概念の特徴と限界がある。

結 語

以上簡単ではあるが、シク教の神概念を考察してきた。その過程で、まったく異なった価値が出会い、融合する精神的発展の過程と、その方法の一つをかい間見ることが出来たと信ずる。多種多様な価値の氾濫によって、現代人は危機に直面していると謂われるが、そして、比較思想が、その問題にとり組もうとした時、シク教の教主(グル)達が行った思索はその一助として十分価値を持つものと信ずる。いずれにしても、中世インドにおこった価値観の混乱期に、これに秩序をあたえようとしたのが、シク教の教主(グル)達だったといえよう。

- (1) Adi Granth, p.1 (以下 A.G. を略す)
- (2) I. Banerjee, *Evolution of the Khalsa*, Calcutta, 1979, p.164
- (3) A.G., p.3
- (4) *ibid*, p.467
- (5) *ibid*, p.1
- (6) M. Hara, *Transfer of Merit*, p.400 (以下「筆者監」)
- (7) W. Norman Brown, *The Metaphysics of the Truth Act*, *Melanges d'indianisme a la memoire de L. Renou*, Paris, 1968, pp.171-177
- (8) *ibid*, p.17
- (9) *ibid*, p.174
- (10) 奈良康明「真実語について」『日本仏教学会報』三八、二五〇頁。
- (11) 同上「三五頁」。

- (12) A.G., p.13
- (13) *ibid*, p.2
- (14) *ibid*, p.2
- (15) *ibid*, p.200
- (16) *ibid*, p.3
- (17) *ibid*, p.23
- (18) *ibid*, p.3
- (19) *ibid*, p.1
- (20) *ibid*, p.1
- (21) *ibid*, p.472
- (22) *ibid*, p.4
- (23) *ibid*, p.556
- (24) *ibid*, p.2
- (25) *ibid*, p.30
- (26) *ibid*, p.26
- (27) *ibid*, p.4
- (28) *ibid*, p.28
- (29) *ibid*, p.29
- (30) *ibid*, p.1342
- (31) *ibid*, p.352
- (32) *ibid*, p.1035
- (33) *ibid*, p.1035
- (34) *ibid*, p.1158
- (35) *ibid*, p.2
- (36)

グルについての考察は、他の機会に譲るがシク教教理の上で、グルの位置は極めて重要であることを指摘しておく。

(はさか・しゅんじ、東方研究会研究嘱託)